

# 東方異世界旅行記録.

raigon

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「やっぱいつ来ても飽きないなあ」

と呟く魔理沙。ここは幻想郷の香霖堂というお店である。ここには「外の世界」から流れ着いた珍しいものばかり。その中で魔理沙はある1つの書物を見つける。それは絵がたくさん書いてあり、その中に戦ったり、恋をしたり、はたまた日常的なものだったり沢山のストーリーが書かれてあった。小説とはまた違うみたいだ。これを見て魔理沙は

「幻想郷もいいけれど、こういう世界にも行ってみたいなあ」

とぼやく。すると

「行ってみたいかい？その世界に」

と言う霖之助の声がした。

※これは東方Projectの二次創作作品です

※原作の設定とは少々異なります

※誤字脱字などは報告してくださいと助かります

# 目次

p a g e 1	「始まり」	1
p a g e 2	「旅仲間」	5
p a g e 3	「用意周到に」	9

# page 1「始まり」

「さてさて、今日も面白そうなのがたくさんありそうだけー！」

そう言って私こと霧雨魔理沙は足を進める。現在はここ香霖堂に来ている。ここは毎日面白そうなものが入荷されるからなあ。

「と、なんだ？この本。えーつと…。まあ読んでみるか！」

私はその本を読み進める。様々な絵とストーリーが構築されていて、面白い。いや、面白すぎる。

「幻想郷もいいけれど、いつか私もこういうところに行ってみたいなあ…」

と私は呟く。すると、

「行ってみたいかい？その世界に」

いつのまにか霖之助が帰っていた。

「どこに行ってたんだよこーりん。戸締りはちゃんとしておかないと誰かが盗みに来るとかもしれないだろ。」

「ちよつとそこまで出かけただけさ。戸締りしてなかったのはこの時間帯にはいつも魔理沙しか来ないから別にいいかなと思っただけ。というより盗みに定評がある君に盗

みが来るかもと言われてもねえ…。」

「おい。それは掻き立てならねーな。私は死ぬまで借りるだけだからな。最近覚えた魔法の実験台にしてやろうか?」

「まあそんなことはさておき」

「そんな事!?!」

クソつ。霖之助に軽くあしらわれるなんて…!

私が苛ついている中、霖之助こんなことを言い始めた。

「さつきその本の中の世界に行ってみたって言いたって言ったよね。」

「まあ、だいたい合っているが…。」

「実は最近空想の世界に行ける装置が幻想郷に流れ着いてね。それにはそこそこの量の魔力を注ぎ込み、そしてある事をするだけでその世界に行けてしまうという優れたものなんだ。」

「へえ。そんなものが。」

「定員人数は魔力を注ぐ量によって異なるからね。」

「ああ、無限に誰でも連れて行けるといわけではないんだな。」

「魔理沙ぐらいたと五人ぐらいは安全に連れて行けると思うよ?」

「ちなみに聞いたくけど、それ以上連れて行くとどうなるんだ?」

「よくわからないけど、恐らくその世界に行つた時に連れて行く人たちがその世界でばらばらになるか、旅立つ時に魔力が暴発して帰らぬ人になるか、だね。」

「うわあ…。それは危険だな。」

苛立ちも無くなつた私は霖之助の言葉を熱心に聞いていた。

「最近退屈してたんだよな。これは暇潰しにはもつてこいだなあ…。」

「まあ、僕には扱えないし、この装置は君にあげるよ。操作方法とかも一緒に渡しておくね。あと行くときは僕に知らせて、香霖堂から行くこと。わかつたね。」

そう言つて私に渡してきた。黒光りしている、特にこれといった装飾はない指輪だ。「ありがとな。こーりん。大切にに使わせてもらうぜ。」

瞬間、ふと疑問に思つた。

「なあ、こーりん。これ、博麗大結界とかは大丈夫なのか？その…、別世界に行くんだからさ。そこが問題になるんじゃないか？」

「ああ、その点は問題ないよ。これは『ワープ』しているのと同じ原理だからね。ワープなら博麗大結界は障害にならないと思うよ。」

成る程。そういうことか。

「改めて、ありがとな、こーりん！」

「いや、いいんだよ。僕には使えないからね。いらぬものを取つてくれたようなもの

だし。」

「今日はこれで香霖堂を出て、家に向かった。なんだって今はもう夕方だ。明日、つかってみるとするぜ！」



## page 2 「旅仲間」

「ふあゝあ…、よく寝たぜ。…よし、行くとするか！」

朝早く起きた私は取り敢えず博麗神社に行く。昨日霖之助からもらった道具を使った異世界旅行に霊夢を誘う為だ。今は午前9時だ。この時間帯なら霊夢はきつと起きているはずだ。

「お〜い、霊夢ー。いないのかー？」

早速博麗神社に着いた私は部屋をあちこちと見渡す。

「霊夢ー、どこにi…。ああ、ここにいたのか。」

「なによ、朝っぱらから騒がしい…（ズズズー）」

霊夢はどうやら部屋でお茶を飲んでいたようだ。早速誘おうかな。

「霊夢ー、実はな……………」

あれ？ちよつと待てよ…………。

「ん？どうしたのよ。いきなり黙り込んじゃって。」

「…博麗大結界って、もしかしなくても霊夢が維持しているのか？」

これがすつごい気になる。もしそうだとしたら霊夢と異世界旅行なんていけない

じゃないか。

「…あ、あー、それね…。実は博麗の巫女は結界を維持するのにそれ程必須というほどではないの。はつきりいつてスキマ妖怪が管理しているんじゃないかしら。」

「呼んだ？」

「呼んでない。」

突然現れた紫にも即座に対応する霊夢。

「…どうせさっきの会話を聞いてたんでしょ。単刀直入にいうと博麗大結界はあんたが管理してるの？私も小さい頃結界の維持の仕方を先代の博麗の巫女に教わったけど、『これはほとんど使わないだろう、あくまで何かあった時の保険として教えている』って言われたんだけど…。」

「途中からしか聞いてないんだけどねえ。そうねえ、結界の維持は私と藍と霊夢の誰か1人が管理すれば問題ないわ。橙にはまだ早いけどね。」

「成る程…。だから私が教わっても殆ど意味がなかったのね。紫や藍は寿命がないもの。もし二人に何かがある事なんて殆ど…。いや、絶対と言っていいほど無いんじゃないかしら。」

「買い被りすぎよ。月の民が来ると手に負えなくなるかもしれないし。私だって守谷の神様と本気で戦っても負けるんじゃないかしら。」

「そんなにあそこの神様強いのか？ 異変の時でさえギリギリだったのに……」

「あれは多分結構手加減してると思うわ。 ってそんな話はさておき……。 どうして今にもなって博麗大結界はだれが維持しているかなんてことを聞いたのかしら。」

「あ、そうだった。 魔理沙に誰が博麗大結界を維持しているのかって言われたんだった。 魔理沙、 どうしていきなりそんなことを聞いたのよ。」

「霊夢がそう言っていて私に話しかけてくる。 今の会話は完全に私は蚊帳の外だったからちよつとぼーつとしてた。 危ない危ない。」

「ん……？ ああ。 実は昨日こういふことがあつてだな……。」

二人に昨日香霖堂であつたことを全て話した。 特に霊夢は結構興味を抱いたようだ。

「成る程。 異世界に行けるのね。 それで、 博麗大結界の事を話し始めた理由は……。」

「いやあく。 今日霊夢をその異世界旅行と一緒に行こうと誘おうとしたんだけどな。 博麗大結界を霊夢が維持しているんだつたら一緒に行けないじゃないかと思つて。 で、 駄目元で言つてみただけつて事だぜ。」

「成る程ね、 別にいいわよ。 異変があつた後は暫く異変が起きないし。 何より面白そうだしね。 で、 行く人は何人にするのよ。」

「取り敢えずまだ霊夢しか誘つてないが、 行くとしても最初は三人くらいにしておくぜ。」



## page 3 「用意周到に」

私は博麗神社を後にし、家に帰る。やつぱりすぐ行くわけにはいかないから、それぞれ支度をして明日の10時に香霖堂に集まるという予定だ。にしても、紫が来るとはなあゝ。何か裏があるのかもしれないが、まあ、あまり気にしないでおう。

「そういうえば、魔力を貯めてからある事をする事で異世界に行けるんだったよな。説明書見るのめんどいし、直接こーりんに聞くとするか！」

私は家に帰る前に香霖堂に行くことにした。

「つと。とーちやくとーちやく。」

私は早速店内を見渡す。えーつと、あ、いたいた。

「よーこーりん。ちよつと聞きたいことがあるんだが。」

「ん？ああ、魔理沙じゃないか。どうしたんだい？異世界に行くために報告しに来たのかい？」

「いや、違うんだけどな、説明書見るのめんどいから、直接聞きに来たんだ。簡潔にいうと、魔力を貯めてからある事をして異世界に行けるって言うってたけど、ある事ってなんだ？」

「あ、そつか。言つてなかつたね。ある事つてのは…。」

「ある事つてのは…?」

「モリヤステツプさ。」

「…はあ? あれ踊らなきやいけないのか? めちやくちや嫌なんだけど。」

「…まあ、嘘なんだけどね。」

「はあ?」

あとでマスバ放つてやる…!

「で、結局は何なんだ?」

「えっと、魔理沙には呪文を唱えてもらうよ。なんていうかは書いてある紙を渡すから。」

…えっと、そんな疑うような目で見ないで」

さつき嘘ついたんだから仕方ないだろ。つと思つている間に霖之助にその紙を渡さ

れた。

「一字一句間違えないでね。間違えたら変なとこに飛ばされるかもしれないから。」

「ああ。分かつたぜ。」

「そういえば、魔理沙以外に誰が異世界に行くんだい?」

「…えっと。私と、霊夢と、後は紫だけ。」

「…へえ。霊夢はまあ分かるけどあの賢者さんも行くんだね。」

「ああ、まあ紫があれば何かあった時も戦力的には問題ないからな。っと、そうだ。さっきお前私に嘘ついたよな。なんかイラつとしたからマスパに撃たれる。こっちは来い。」

「ち、ちよつと待って。その件は謝るよ。：ほんとごめんって。」

「：まあ許してやるよ。いつまでもネチネチ言ってられないしな。」

「そういうえば魔理沙。異世界に行くとしても魔力はどうするんだい？ 言った世界には魔素がないかもしれないよ？ 体内でも生成できるとはいえ、生成速度は結構遅いわけだし。予備は持っておいたほうがいいよ。」

「：それもそうだな。ちよつと紅魔館にでも寄ってパチュリーに手伝ってもらうか。」

「それには魔理沙が本を何冊か返さないのと了承しないかもよ？」

「って事は、一旦家に帰るか。」

私はこーりに別れを告げ、家に向かった。ついでに家で明日の用意もしておいた。後は紅魔館に行ってパチュリーに10個ぐらい最高純度の魔法石を入れてもらおうか。

「よし。明日の準備もできたし、取り敢えずは紅魔館に行くか！」

私は何十冊かの本を持って紅魔館に向かった。